

〈研究ノート〉

東亜同文書院の内蒙古調査旅行（続き）

森 久 男
ウルジトクトフ

はじめに

- I 東亜同文書院の内蒙古調査旅行の発端
 - II 清末期の内蒙古調査旅行
 - III 満洲事変以前の内蒙古調査旅行（以上前々号）
 - IV 満州国成立後の内蒙古調査旅行
 - V 蒙疆地域における現地調査旅行
 - VI 内蒙古に関する調査報告の刊行状況
- むすび

IV 満州国成立後の内蒙古調査旅行

1931年9月に満州事変が勃発するや、日中関係は悪化し、中国各地における反日運動は高揚して、国民政府が東亜同文書院生に発行していた旅行査証の発行が一時停止された。1932年3月、満州国の成立に伴って、内蒙古東部とホロンバイルは興安省に編入された。

1932年に東亜同文書院が蒙古地域に派遣した第29期生の調査班は、第二班（呼倫貝爾遊歴班）、第三班、第十三班、および第十六班である。

第二班の班員は、岩松武・土屋定国の2人で、彼らの旅行経由地は、上海—大連—奉天—四平街—通遼—ダルハン王府—通遼—洮南—チチハル—泰安—チチハル—満州里—ハイラル—ハンダガヤーアルシャン—ハイラル

—ハルピン—長春—吉林である。両者共同執筆の大旅行日誌は 200 頁以上あり、付録として「最近外蒙事情」「呼倫貝爾事情」が添付されている。年度旅行誌『北斗之光』に旅行誌「草原を思ふ」が収録されている。卒業後、土屋は蒙古通として興安南省職員となり、終戦直後にジャライト旗で殺されている。

第三班の班員は、磯西英次・国沢徳満等の 4 人で、彼らの旅行経由地は、上海—青島—済南—北平—天津—山海関—錦州—奉天—新京—ハルピン—昂昂溪—チチハル—洮南—鄭家屯—通遼—四平街—公主嶺—新京—吉林—新京である。『北斗之光』に旅行誌「洮南よりチチハルへ」が収録されている。

第六班の班員は、広川縫之助・関弥七等の 3 人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—錦州—打虎山—通遼—ダラハン王府—通遼—鄭家屯—洮南—チチハル—ハルピン—満州里—チチハル—ハルピンである。『北斗之光』に旅行誌「蘇満国境に立つ」が収録されている。

第十三班の班員は、仲田朝信・富田国弘等の五人で、彼らの旅行経過地は、上海—北平—張家口—北平—天津—大連—營口—打虎山—彰武—通遼—鄭家屯—チチハル—ハルピン—新京—奉天である。『北斗之光』に旅行誌「朔北の地へ」が収録されている。

第十六班の班員は、山本清次郎・甲斐治義等の四人で、彼らの旅行経由地は、上海—青島—北平—天津—山海関—錦州—打虎山—通遼—ダラハン王府—鄭家屯—洮南—チチハル—ハルピン—新京である。『北斗之光』に旅行誌「ダラハンの森に憧る」が収録されている。

第 29 期生の『第二十六回支那調査報告書』には、蒙古関連の報告書として「最近の外蒙古事情」「呼倫貝爾事情」「達爾漢親王地」が収録されている。

1933 年から 1934 年にかけて、第 30・31 期生が二年連続で満州国各県における調査旅行を実施した。当時、伝統的特徴を残した蒙古各旗は新設の興安省に帰属していたが、書院生による調査は「非開放蒙地」にはあまり

及ばず、蒙旗と関連した調査は農耕地化がすすんだ「開放蒙地」で実施されている。

第 30 期生による 1933 年度の蒙古調査としては、通遼県調査班、洮南県調査班、およびハイラル調査班の記録が残っている。通遼県調査班の班員は、安藤勝・野口孝行・興田誠二の 3 人で、彼らの旅行経由地は、上海—青島—大連—奉天—四平街—鄭家屯—通遼—四平街—新京—ハルピンである。年度旅行誌『亜細亜の礎』に旅行誌「漢人の蒙古」が収録されている。『第二十七回支那調査報告書』第五巻に収録された「通遼県調査」は、当調査班の大旅行報告書と見られる。その構成は次のとおりである。

第一章 地勢

第二章 人口

第三章 交通

第四章 産業

第五章 商業及金融

第六章 宗教

第七章 通遼市

第八章 開魯

第九章 錢家店

第十章 通遼県農村経済

洮南県調査班の班員は、瀧野貞明・長瀬義一等の 4 人で、彼らの経由地は、上海—青島—大連—奉天—四平—鄭家屯—開通—洮南—洮安—葛根廟—王爺廟—蘇鄂公府—突泉—チチハル—克山—海倫—ハルピン—新京—吉林—奉天—大連である。『亜細亜の礎』に旅行誌「巴彥那木爾と語る」が収録されている。巴彥那木爾（バインナムル）は当時のコルチン右翼後旗ジャサック（旗長）である。同調査班はおもに洮南県について調査したが、旅行誌の一部に当時のコルチン右翼前・後旗の状況に関する記載がある。

ハイラル調査班の班員は、俵弘・ト部義賢等の 4 人で、彼らの経由地は、上海—青島—大連—奉天—新京—ハルピン—ハイラル—三河地方—キラリ

ン—奇乾—ハイラル—満州里—ダライ湖—満州里—ハイラル—カンジュール廟—ハンダガヤー—ハロンアルシャン—ハイラル—ハルピンである。ハイラルに到着後、同調査班は騎兵第一旅団長高波少将や協和会会長鈴木等の協力を得て、彼らと一緒に三河・満州里等を旅行している。『亜細亜の礎』に旅行誌「黄塵行」が収録されている。『第二十七回調査報告書』第二十五巻の「三河地方及北部国境調査」は、同調査班の大調査報告書で、その構成は次のとおりである。

第一編 三河地方及北部国境地方

興安北分省

三河地方

北部国境地方

第二編 南部呼倫貝爾概説

第三編 呼倫貝爾畜産調査

第四編 満州里概観

第五編 海拉爾におけるトルコタートル

第31期生による1934年の蒙古調査としては、綏遠省寧夏甘肅省調査班、朝陽建平赤峰県調査班、開通瞻榆突泉県調査班、興安東分省布西調査班、洮安ソロン県調査班、扎蘭屯免渡河満州里調査班、および林西天山県調査班の記録が残っている。

綏遠寧夏甘肅省調査班の班員は、高橋欽次郎・篠倉良雄・雪本新吉の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—北京—張家口—大同—帰綏—包頭—五原—臨河—磴口—石嘴子—寧夏—中衛—蘭州—咸陽—西安—鄭州—北京—上海である。年度旅行誌『出廬征雁』に旅行誌「虎穴探訪」が収録されている。

朝陽建平赤峰県調査班の班員は、橋ヶ迫実・清田武の2人で、彼らの旅行経由地は、上海—大連—北京—古北口—承德—凌源—朝陽—建平—赤峰—北票—錦州—奉天—洮南—チチハル—克山—海倫—ハルビン—新京である。『出廬征雁』に旅行誌「君は熱河へ」が収録されている。『第28回支那

調査報告書』第十巻に収録された「熱河省朝陽赤峰県調査」は、当調査班の大旅行報告書と見られる。この報告書には、朝陽県と赤峰県における地勢・交通・経済・教育・厚生・社会悪・商業・貨幣度量衡・金融・都会について記されている。

開通瞻榆突泉県調査班の班員は、磯川武夫・黒田正明の2人で、彼らの旅行経由地は、上海―北京―錦州―打虎山―通遼―鄭家屯―開通―瞻榆―高力板―突泉―洮南―王爺廟―ハロンアルシャン―ソロン―ハイラル―満州里―昂昂溪―新京―奉天―大連である。『出廬征雁』に旅行誌「内蒙古の旅」が収録されている。『第28回支那調査報告書』第十七巻に収録された「奉天省開通瞻榆突泉県調査」は、同調査班の大旅行報告書である。

興安東分省布西調査班の班員は、辻武雄・浅野徳太郎・富岡康の3人で、彼らの旅行経由地は、上海―大連―営口―奉天―新京―吉林―拉法―新站―五常―ハルビン―チチハル―訥河―布西―チチハル―洮南―四平街―奉天である。『出廬征雁』に旅行誌「曠野の瞑想」が収録されている。

同調査班の大旅行報告書は『第28回支那調査報告書』第十九巻「興安東分省莫力達瓦旗調査」である。清朝時代、莫力達瓦（モリダワ）地域は黒龍江將軍所屬のブトハ八旗の一部であったが、民国期に布西県に編入され、満州国成立後にモリダワ旗が設立され、興安東分省に帰属した。同報告書は、同地域の地勢・交通・物産・人口・家族・経済・教育・厚生・社会悪・商業・貨幣度量衡・金融機関について記している。

洮安ソロン県調査班の班員は、円谷清治・山内英之の2人で、彼らの旅行経由地は、上海―大連―奉天―新京―四平街―鄭家屯―洮南―王爺廟―ハロンアルシャン―ソロン―王爺廟である。『出廬征雁』に旅行誌「洮温線を探る」が収録されている。

『第28回支那調査報告書』第二十四巻に収録された「奉天興安省洮安喜扎嘎爾旗事情調査」は、同調査班の大旅行報告書で、第一編「奉天省洮安県調査」と第二編「興安省喜扎嘎爾旗事情調査」の二つの部分からなっている。喜扎嘎爾（キジャカル）旗は元々黒龍江ブトハ副都統衙門に帰属し

ていたが、1928年に黒龍江省は同地に屯墾公署を置いた。満州国成立後、キジャカル旗が設置され、興安東分省に帰属した。この報告書は、総説・人口・交通・治安及財政・家族及風俗・産業・工業・商業・金融・教育及文化・社会悪・都邑・古跡・宗教・東部内蒙古諸問題等の16章から構成されている。

札蘭屯免渡河満州里調査班の班員は、白石博・奥田重信の2人で、彼らの旅行経由地は、上海—大連—奉天—新京—四平街—洮南—チチハル—札蘭屯—免渡河—海拉爾—満州里—ハイラル—カンジュール廟—ハロンアルシャン—ソロン—王爺廟—洮南—チチハル—ハルピン—新京である。『出廬征雁』に旅行誌「白樺の興安嶺を越えて」が収録されている。『第28回支那調査報告書』第二十五巻に収録された「興安省札蘭屯免渡河満州里調査」は、同調査班の大旅行報告書である。

林西天山県調査班の班員は、三浦計太郎・中井川信雄・重松保徳の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—大連—錦州—奉天—朝陽—建平—赤峰—林西—西ウジュムチン王府—林西—大板—林東—天山—開魯—通遼である。『出廬征雁』に旅行誌「生命線を行く」が収録されている。『第28回支那調査報告書』第二十六巻に収録された「興安省林西林東一般事情調査」は、同調査班の大旅行報告書である。

第32期生による1935年度の蒙古調査としては、チャハル省・蒙古旅行班、平泉県・凌源県調査班、および綏遠省遊歴班の記録が残されている。チャハル省・蒙古調査班の班員は、平田敏生・前田八束等の5人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—張家口—包頭—帰綏—大同—張家口—北平—古北口—承德—圉場—ドロ—経棚—林西—烏丹—赤峰—朝陽—錦州—大連である。年度旅行誌『翔陽譜』に旅行誌「満支国境を行く」が収録されている。第32期生の『第29回支那調査報告書』付録として、「察哈爾省北部諸県状態」「多倫事情」「多倫における喇嘛廟について」「内蒙古の諸問題」が収録されており、これらは同調査班の大旅行報告書と思われる。

平泉県・凌源県調査班の班員は、福田克美・服部文彦の2人で、彼らの

旅行経由地は、上海—北平—古北口—承德—平泉—凌源—朝陽—錦州—打虎山—通遼—鄭家屯—洮南—チチハル—ハイラル—ハルピン—吉林—新京—奉天—大連である。『翔陽譜』に旅行誌「熱河に秘境を探りて」が収録されている。『第29回支那調査報告書』第四巻に収録された「熱河省調査」は、当調査班の大旅行報告書と思われる。

綏遠省遊歴班の班員は、竹内信夫・小森朴郎・平井透の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—張家口—大同—豊鎮—帰綏—五原—包頭—北平—承德—新京—大連である。『翔陽譜』に旅行誌「北路西遊」が収録されている。『第29回支那調査報告書』には同調査班の大調査報告書は見当たらない。

第33期生による1936年の蒙古調査としては、チャハル省遊歴班、綏遠省遊歴班(1)、綏遠省遊歴班(2)、綏遠チャハル省遊歴班の記録が残されている。チャハル省遊歴班の班員は、鳥羽田・藤岡・島津の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—張家口—柴溝堡—張北—多倫—朝陽—德化—スニト—ドロン—囲場—承德—赤峰—錦州—大連である。年度旅行誌『南腔北調』に旅行誌「足跡」が収録されている。

綏遠省遊歴班(1)の班員は、日高五郎で、その旅行経由地は、上海—南京—北平—大同—包頭—北平—大連である。『南腔北調』に旅行誌「草原に捧る」が収録されている。

綏遠省遊歴班(2)の班員は、副島清高・森崎正夫・両角昇の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—大同—帰綏—包頭—帰綏—張家口—北平—奉天—新京—ハルピン—大連—上海である。『南腔北調』に旅行誌「北調」が収録されている。

綏遠チャハル省遊歴班のメンバーは、石田三郎・熊田俊夫・永福茂の3人で、彼らの旅行経由地は、上海—北平—張家口—大同—帰綏—包頭—臨河—五原—磴口—包頭—張家口—北平—上海である。『南腔北調』に旅行誌「朔風に叫ぶ」が収録されている。

第34期生による1937年度の蒙古旅行としては、北満班が東蒙古地域を

旅行し、年度旅行誌『嵐吹け吹け』に旅行誌「北満行」が収録されている。

V 蒙疆地域における現地調査旅行

東亜同文書院の蒙疆調査はあまり世に知られていないが、書院生が蒙疆地域で実施した際の大旅行調査日誌・大旅行調査報告が一部残されているので、各期の大旅行誌や『東亜同文書院大学東亜調査報告書』（1939～1941年）によって不足分を補いながら、その概観を紹介してみよう。

1937年7月7日に盧溝橋事件が発生するや、戦火は華北全域に波及し、第五師団は南口から内長城線を超えて北上して山西方面へ進撃した。第五師団と呼応して、関東軍チャハル派遣兵团は熱河省を超えてドロンから張北方面へ進撃し、張家口・大同・包頭を占領して、蒙疆三自治政府（察南自治政府・晋北自治政府・蒙古連盟自治政府）を樹立した。

第34期生は、1937年6月1日に上海から中国各地へ大調査旅行に出発したが、盧溝橋事件の勃発に伴って、7月8日に同文書院は各班の旅行コースの適宜変更を電命している。当時、第五班（河北省）の橘清志・豊崎龍太郎・脇田五郎が天津・北京を経由して、事変勃発直前の張家口を旅行している。第34期生の旅行誌『嵐吹け吹け』には、橘の旅行誌「北支の感覚」が収録され、「察南の抗日氣勢」や「張家口の邦人のあまりにも悲壮な姿」が記されている。

第35期生による1938年度の蒙疆調査で作成された大旅行日誌・大旅行報告書はないが、同期生の大旅行誌『靖亜行』には、第二班（北支）の横尾幸隆・本土敏夫・田浦正成の旅行誌「悠久の蒙古」が収録され、張北・徳化から西スニト・貝子廟一帯の純蒙古地帯における蒙古人の放牧・住居・風俗・宗教・食生活等について観察記録を残している。

第三班（北支）細萱元四郎が『靖亜行』に寄稿した旅行誌「京包線」は、7月6日に北京から京包線で張家口・厚和・包頭・大同一帯を回って、各地の政府機関や商社・団体で働く先輩の便宜を得ながら、成立後まもない

蒙疆三自治政府管内の様子を記している。厚和では先輩の紹介で蒙古連盟自治政府主席徳王と謁見し、徳王から「あなた方の支那語は大変うまい、……貴下方も何卒習得された語学を通して今後ますます東洋平和のため御尽力あられ度い」と激励されている。

第36期生による1939年度の蒙疆調査は、旧チャハル省班、第六班（綏遠調査班）、第九班（蒙疆遊歴班）が実施している。旧察哈爾省班の班員は、安藤武治・尾見博已・深沢治平の3人で、大旅行日誌はすべて揃っており、大旅行報告書は、安藤「蒙疆に於ける交通状況」、尾見「旧察南、晋北兩政権管内ニ於ケル教育状況」、深沢「察哈爾班人口調査報告」がある。年度旅行誌『大旅行記』に深沢の旅行誌（大旅行日誌の一部である張家口・張北・ドロン滞在記録の詳録）「察哈爾省（多倫難行記）」が収録され、『東亜調査報告書』（昭和十四年度）は、安藤の大旅行報告書の一部を「蒙疆に於ける自動車交通事情」と改題して抄録している。

綏遠調査班の班員は、桜井善一・房野博・仲俣秋夫・伊東重美の4人で、桜井・房野の大旅行日誌のみがあり、大調査報告書には、桜井「蒙疆ニ於ケル日本人商工業者ノ活動情況」、房野博「蒙古連盟自治政府管内ノ教育状況」、仲俣「蒙疆地区各方面出廻重要物産の品目、数量、価格」がある。伊東の大旅行報告書の現物はないが、『東亜調査報告書』（昭和十四年度）に彼の「蒙疆に於けるカトリック宣教師の活動状況」が収録されている。

蒙疆遊歴班の班員は、大沢康男・浅川典生・宇野善藏・南恭輔の4人で、大調査日誌は大沢の一編のみがあり、大旅行報告書には、大沢「蒙疆地域に於ける羊毛資源に就いて」、浅川「蒙疆金融事業」、南「蒙疆地域に於ける支那人の対日感情」等がある。『大旅行記』に収録された南の旅行誌「蒙疆」は、京包線沿線事情を紹介している。宇野の大旅行報告書の現物はないが、『東亜調査報告書』（昭和十四年度）に彼の「蒙疆教育概況」が収録されている。

第37期生による1940年度の蒙疆調査は、綏遠省調査班と山西省調査班が実施している。綏遠省調査班の班員は、八木了彦・加藤咨郎・吉田善治・

江藤茂樹・平田文次の5人で、大旅行日誌は4編すべて残っており、大調査報告書には、八木「蒙疆の戦後復興状況」、加藤「蒙疆に於けるカトリック教勢」がある。山西省調査班の晋北調査では、平田文次の大旅行報告書「大同を中心とする晋北地方の交通」のみが残っており、他のメンバーの調査状況は不詳である。第37期生の年度旅行誌は編纂されず、『東亜調査報告書』(昭和十五年度)には、蒙疆関係の調査報告書は収録されていない。

第38期生による1941年度の蒙疆調査に関する資料は乏しいが、第三班(山西省)、第七班(蒙疆)、第八班(蒙疆)の記録が若干残っている。第三班のメンバーは、森精市(金融)・奥野重雄(地理)・荒木茂(生活)の3人で、年度旅行誌『大陸遍路』に荒木の旅行誌「思ひ出の行脚」が掲載されている。『大東亜報告書』(昭和十六年度)は、森・荒木「包頭に於ける当舗の研究」を収録している。

第七班の班員は、秋貞健一(工業)・山田公太郎(生活)・松本浩一(生活)の3人で、『大陸遍路』に秋貞・松本の旅行誌「蒙疆所々」が収録され、包頭・厚和・大同・張家口・多倫の旅行記を綴っている。

第八班のメンバーは、白井秀夫(地理)・尾藤昇(教育)・中條康彰(生活)の3人で、『大陸遍路』に同班の旅行誌「萬里の長城」が掲載され、蒙疆政府最高顧問金井章次やドロンのカンジュルワ活仏との会見記が綴られている。大調査報告書としては、白井「薩拉齊県に就いて」が残っている。

第39・40期生による1942年度の蒙疆調査は、第一班(蒙疆)、第二班(蒙疆)、第三班(蒙疆)、第四班(蒙疆・北京)が実施している。従来、書院生による調査は個人調査が中心であったが、同年度の調査は共同調査というスタイルが採用され、各班は指導教授の統率下で事前の調査準備に時間をかけた結果、過去の調査より報告書の水準が高くなっている。

第一班のメンバーは、高橋昇治・奥田隆春・黒木正吉の3人で、大旅行日誌は欠けているが、年度旅行誌『大陸紀行』には「蒙疆」と題する奥田の大同見聞記が収録されている。大旅行報告書は「主要都市における金融機関及通貨の現状」と題して、蒙疆の金融制度を概観してのち、大同・厚

和の金融制度について詳述している。

第二班のメンバーは、佐藤泰司・高田宣夫・坂下雅章・大島新吾の4人で、坂下の調査日誌には、調査対象である包頭の9軒の蒙古貿易業者に対する調査の手順が詳しく記されている。『大陸紀行』には大島「蒙古草原漫語」が収録され、蒙古草原における蒙古人の風俗・習慣を記している。大旅行報告書は「包頭に於ける蒙古業——包頭市の経済的機構の分析」が残されている。

第三班のメンバーは、斉藤博・瀧澤哲雄・松原一夫・野村智一の4人で、大旅行日誌は4編すべて揃っており、「貸店業」を通じて西北貿易・漢蒙貿易・商店ギルドを解明する手順を詳しく述べている。『大陸紀行』には斉藤博「胡砂嵐」が収録され、蒙古草原で見聞した自然や蒙古人の生活様式を紹介している。大調査報告書は「包頭市調査資料」が残されている。

第四班のメンバーは、中村輝美・吉田倬三・大江勝・秋元伸一の4人で、大旅行日誌は4編すべて揃っており、大同・厚和・包頭・張家口等の主要都市のみならず、百靈廟・西スニト・貝子廟・西ウジュムチン等の草原地帯へ深く入り込んで、特務機関・政府・大蒙公司等の協力を得て、純蒙古地帯の民政・経済・教育・蒙旗建設の状況を实地調査している。7月11日には第2回ジャサック（旗長）会議を見学するという珍しい体験をしている。大調査報告書は「純蒙地域政治建設状況」が残されている。蒙疆政権研究において、旗長会議や蒙旗建設運動に関する資料は乏しいので、本報告書に収録された資料はきわめて貴重である。本報告書の目次は次のとおりである。

序に代へて

第一章 民政関係

- (1) 治安関係
- (2) 中央よりの政治力の浸透
- (3) 札薩克会議民政に関する決定事項

第二章 経済関係

- (1) 生活状況
- (2) 産業概要
- (3) ホリシア
- (4) 札薩克會議ホリシアに関する決定事項

第三章 文教関係

- (1) 教育
- (2) 喇嘛教

第四章 蒙旗建設運動

- (1) 序言
- (2) 建設機運確立への歴史
- (3) 即地適切重点主義的施策の採用
- (4) 蒙旗建設隊
- (5) 建設工作実施事項
- (6) ホリシア運動
- (7) 財政建設概説
- (8) 文教建設
- (9) 保安工作
- (10) 結語

第五章 結言——将来の展望

1942年度の学生調査大旅行に参加した第五班（太原）の永井康吉は、『大陸紀行』に発表した「大樹湾」という一文の中で、包頭南方の黄河南岸にあるオルドス草原の蒙旗地帯の旅行記録を記している。第五班が蒙疆調査を実施したかどうかは不明で、さらなる考察が必要である。

同文書院生の蒙疆調査旅行は、大旅行調査報告の作成が主目的であるが、大旅行日誌にも興味ある記述が残されている。大旅行日誌には、学校に提出された原稿と公刊された各年度旅行誌があるが、後者は日誌の一部を詳述したもので、両者の区別に注意する必要がある。書院生は各地の先輩達の援助を得て調査の便宜を得ており、彼らのネットワークを分析する

ことによって、蒙疆地域で活躍している東亜同文書院卒業生の分布を知ることができる。

蒙疆地域において書院生の現地調査に協力した卒業生としては、沢井鉄馬（バイントラ盟・シリングル盟参与官）、櫛部正暉（厚和市公署参事官）、伊東太（察南政庁庶務課長）、盛岡正平（張家口総領事）、寺崎祐義（張家口領事館員）、杉谷善藏（蒙疆新聞社常務理事）、川口市之助（大蒙公司社長）、小笠原俊三（大同居留民団長）、安斎庫治（満鉄包頭公所）等がいる。

VI 内蒙古に関する調査報告の刊行状況

東亜同文書院は、長年にわたる現地調査を通じて得られた中国各地に関する大量の情報・資料を基礎として、『支那経済全書』（全12巻、1907年）、『支那省別全誌』（全18巻、1917～1920年）、『新修支那省別全誌』（全9巻、昭和1941～1946年）等を編纂している。『支那省別全誌』に収録された蒙古関連の項目は、以下のとおりである。

第十八巻「直隸省」：1920年刊行。第5～16期生の調査報告書を使用し編纂され、蒙古地域へ旅行した「口外喇嘛廟熱河班」（第6期、1908年）、「関内外蒙古班」（第7期、1909年）、「錦斉線調査班」（第8期、1910年）、「関外班」（第14期、1916年）、「内蒙古班」（第15期、1917年）等の提出した調査報告書を利用している。蒙古に関する部分は以下のとおりである。

- 1, 張家口庁城（第6・8・14期生；第二編「開市場」第四章。内容は位置地勢・気候・沿革・戸数人口・市街・官公衙・市況・宗教・物価・旅館・交通・飲料水等を含む）
- 2, 多倫諾爾庁城（第14期生；第二編「開市場」第五章）
- 3, 赤峰県城（第6・7・14期生；第二編「開市場」第六章）
- 4, 熱河（第6期生；承德県城、第四編「都会」第十八章）
- 5, 平泉県城（第6期生；八溝、第四編「都会」第十九章）

- 6, 烏丹城（第 6 期生；第四編「都会」第二十一章）
- 7, 開魯県城（第 6 期生；第四編「都会」第二十三章）
- 8, 林西県城（第 6 期生；第四編「都会」第二十四章）
- 9, 経棚（第 6 期生；第四編「都会」第二十五章）
- 10, 喀喇沁王府（第 7 期生；第四編「都会」第二十七章）
- 11, 朝陽府城（第 7・14 期生；第四編「都会」第二十八章）
- 12, 凌源県城（第 7 期生；塔子溝，第四編「都会」第二十九章）
- 13, 阜新県城（第 8 期生；第四編「都会」第三十章）
- 14, 綏東県城（第 8 期生；小庫倫，第四編「都会」第三十三章）
- 15, 京奉鐵道（第五編「交通」第一章「鐵道」第一節）
- 16, 京張鐵道及其支線（第 14 期生；第五編「交通」第一章「鐵道」第二節）
- 17, 口外諸流民船（第五編「交通」第二章「水路及民船」第十二節）
- 18, 赤峰における麻（第六編「主要物産及商慣習」第七章第二節）
- 19, 赤峰における甘草（第六編「主要物産及商慣習」第八章）
- 20, 張家口における羊毛駱駝毛（第六編「主要物産及商慣習」第九章第二節）
- 21, 赤峰における獸皮（第 14 期生；第六編「主要物産及商慣習」第九章第四節）
- 22, 張家口における牛皮（第 14 期生；第六編「主要物産及商慣習」第十章第二節）
- 23, 赤峰における獸皮類（第 14 期生；第六編「主要物産及商慣習」第十章第三節）
- 24, 多倫諾爾における工業（第 14 期生；第七編「工業及鉍産」第七章）
- 25, 赤峰における工業（第 14 期生；第七編「工業及鉍産」第八章）
- 26, 烏丹城における毯製造業（第 14 期生；第七編「工業及鉍産」第九章）
- 27, 朝陽における工業（第 14 期生；第七編「工業及鉍産」第十章）
- 28, 張家口における輸入品（第八編「輸入品」第三章）

- 29, 赤峰における輸入品（第八編「輸入品」第四章）
- 30, 張家口における商業機関（第九編「商業機関」第四章）
- 31, 熱河における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第三章）
- 32, 烏丹城における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第五章）
- 33, 赤峰における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第七章）
- 34, 開魯における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第八章）
- 35, 林西における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第九章）
- 36, 経棚における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十章）
- 37, 朝陽における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十三章）
- 38, 阜新における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十四章）
- 39, 小庫倫における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十五章）
- 40, 張家口における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十七章）
- 41, 多倫諾爾における金融貨幣及度量衡（第十編「金融貨幣及度量衡」第十九章）

「編纂の説明」からも明らかなように、一項目を編纂する際、一つあるいは複数の調査報告書を利用している。たとえば、「張家口庁城」を編纂する際、第6・8・14期生の調査を同時に利用している。これら、三期の書院生による調査班はすべて張家口で調査を行っている。各期生の調査報告が

充分利用され、より多くの情報を基礎として項目の内容が充実している。

第十七卷「山西省」：1920 刊行。第 6～16 期生の調査報告書を使用して編纂され、蒙古を旅行した「口外喇嘛廟班」（第 6 期生，1908 年）、「甘肅鄂爾多斯班」（第 8 期生，1910 年）等の提出した調査報告書を利用している。蒙古に関する部分は以下のとおりである。

- 1, 帰化城及綏遠城（第 6 期生；第二編「都会」第四十章）
- 2, 薩拉齊県城及包頭鎮（第 6 期生；第二編「都会」第四十一章）
- 3, 寧遠城及豊鎮庁城（第 6, 8 期生；第二編「都会」第四十二章）
- 4, 張綏鉄道（第三編「交通運輸及郵便」第一章「鉄道」第二節）
- 5, 帰化城を中心とする陸路交通（第三編第二章「各地間陸運」第四節）
- 6, 帰化城商業機関（第 6 期生；第九編「商業機関」第十四章）
- 7, 包頭鎮商業機関（第 6 期生；第九編「商業機関」第十五章）
- 8, 豊鎮商業機関（第 6 期生；第九編「商業機関」第十六章）
- 9, 帰化城金融及貨幣（第 6 期生；第十編「金融貨幣及度量衡」第四十六章）
- 10, 包頭鎮金融及貨幣（第 6 期生；第十編「金融貨幣及度量衡」第四十七章）
- 11, 豊鎮金融及貨幣（第 6 期生；第十編「金融貨幣及度量衡」第四十八章）

第六卷「甘肅省附新疆省」：1918 年刊行。主に「甘肅鄂爾多斯班」（第 8 期，1910 年）、「甘肅四川班」（第 11 期生，1913 年）等の調査報告を使用し編纂されている。本巻には蒙古に関する内容は少ないが、関連する項目は以下のとおりである。

- 1, 包頭における物価（第三編「生活程度及物価」第二章）
- 2, 包頭鎮における洋行（第十二編「商業機関及商業慣習」第二章第五節）

1939 年に東亜同文書院が東亜同文書院大学に昇格してのち、書院生の旅行調査報告書のなかで高水準のものを選んで『東亜同文書院大学東亜調査

報告書』が継続して刊行され、筆者が掌握している範囲では、1939・1940・1941年度の3部が残されている。収録された報告書は、地理・経済・商業・資源・対日感情等が多く採録されている。

『支那省別全誌』に引き続いて編纂された『新修支那省別全誌』は、終戦までにその一部である四川・雲南・貴州・陝西・甘粛・寧夏・青海の各巻が完成し、内蒙古関連の資料は公開されていない。東亜同文書院が所蔵する長年にわたる調査資料のうち、第6～16期生の各調査班が纏めた報告書の一部、および第36期生による蒙疆関係の三編の報告書だけが『支那省別全誌』『東亜同文書院大学東亜調査報告書』等に利用され、これ以外の調査報告書のほとんどは未刊のまま今日に至っている。

むすび

東亜同文書院が蒙古地域で実施した現地調査の報告書の内容は、以下のいくつかの内容に分類できる。

第一、蒙古地域地理調査。蒙古地域に関する情報が乏しかった明治末期から大正時代の報告書に多く見られるスタイルである。1905年に外務省が林出賢次郎等5人の新疆・外蒙古旅行に関連する経費を算出する際、中国語「大清会典」等の地理情報を参考にしている。同時期には調査項目が多く、報告書の内容もかなり詳細である。

第二、蒙古地域物産調査。蒙古地域には豊富な自然資源や畜産品が存在しているので、蒙古産羊毛・甘草・皮革・畜産品・鉱産に関する調査が報告書の重要な内容となっている。

第三、経済・商業・金融調査。同文書院は設立当初から商業貿易を専門とする商務科を設置して、日中間の商業貿易に従事できる人材の育成を重視しており、経済・商業・金融に関する情報が報告書の重要な内容を占めている。

第四、都邑調査。近代蒙古地域に興起した都邑のほとんどは、漢族移民

の増加につれて、彼らを管理する機関の設置に伴って出現したが、しだいに蒙古地域の政治交通中心地、あるいは貨物集散地となっていた。したがって、都邑に関連する調査が多く実施されている。

同文書院の調査報告書を総合的に評価すれば、明治末期から大正時代にかけての調査の内容が詳しく、同時代の漢語資料・モンゴル語資料の不足を補っており、文献としての利用価値が高い。1920年代以降、東亜同文会編纂の『支那省別全誌』等が刊行されて、調査旅行が一定の成果を挙げている。同時期、満鉄・関東都督府等が満蒙地域で実施した調査報告として、『東蒙古』『東部蒙古誌草稿』『東部蒙古誌補修草稿』『満州地誌』『蒙古地誌』『満蒙調査復命書』『満蒙全書』等が次々と刊行され、蒙古関連の情報が増えている。その結果、書院生が作成した調査報告書の内容も簡略となり、満鉄調査報告書等を利用したものが増えている。他方、大旅行報告書と並行して作成された旅行日誌には、書院生達の旅行中の見聞が細かく記されており、当時の日本人の蒙古に対する認識、および蒙古社会の実態を理解するうえで、欠くべからざる資料であると評価できる。